

東京二期会オペラ劇場

オペレッタ『チャールダーシュの女王』の楽しみ方 ～第2幕～

田尾下 哲(演出)

休憩を挟んで、第二幕になります。1914年6月27日、土曜日。前幕から7週間ちよつと後。ウィーンにあるエドウィンの実家、リップルト・ヴァイラースハイム公爵の館が舞台です。

●No. 6 ½ 「2幕への導入曲」

(公爵、公爵夫人、合唱)

公爵の館で舞踏会が開催されています。公爵夫妻はたくさんのゲストを入場口で迎え、上機嫌です。

● 7番 「明かりが煌々と照り輝いて」

(公爵、公爵夫人、エドウィン、シュターズィ、合唱)

公爵夫妻の見守る中、エドウィンとシュターズィもかけてやって来ます。華やかに館に大きな円を描きながらワルツを踊るカップルの姿が会場を充たします。公爵夫妻はエドウィンがシュターズィと楽しそうに踊る姿を見て一安心。このままだと今晚にも婚約発表が出来るかも…公爵夫人が二人の様子を探りに行きます。

幼なじみの二人は、シュターズィの両親が亡くなってからは兄弟同然に育てられ、隠し事なく一緒に育ってきた仲です。シュターズィはエドウィンの両親が二人を結婚させたがっていることを告げます。エドウィンは気のない返事をしますが、シュターズィがシルヴァ・ヴァレスクのことを持ち出すとエドウィンは驚きます。実はエドウィンは何度も連絡を取ろうとしていながら電話でも電報でも返事をもらえず、結婚成立の期限である8週間を目前にして意気消沈していたのでした。二人の仲を詮索され、もう終わったと答えるエドウィンに、私たちの家柄に釣り合う人たちの中で、自分たちほどお互いを退屈させないカップルはないんじゃないの？とシュターズィは問いかけます。

● 8番 「私は大きな奇跡を待っている」

(シュターズィ、エドウィン)

結婚に夢を抱くシュターズィに対し、エドウィンは結婚などすぐ飽きるといいながらも、

二人でワルツを踊りながら部屋を別々に出て行きます。

二人の様子を見ていた公爵夫人は「婚約は解消よ！」と公爵に報告します。ならば噂のチャールダーシュの女王との間に子供が出来たに違いない、と公爵は大騒ぎ。「ならん！そういう子供は対面を汚す。…そうだ、罰として、生まれてくる子には、乳母は一人しかつけてやらん！家庭教師も、教授クラスは一人だけだ！……あー、その子の面倒は見てやらんぞ！お祝いも、誕生日とクリスマスと七五三と成人の日と勤労感謝の日と敬老の日と…」と、言葉では怒り、「芸人の血が我が一族に混ざるなど前代未聞だ！シルヴァとの結婚は決して認めない」といいながらもおじいちゃんになることにまんざらでもない様子。

そして、アメリカのツアーを途中で切り上げたシルヴァとボニが館にやって来ます。シルヴァは「今日だけはボニの新婚の妻として振る舞わせて」とボニに頼み、エドウィンの様子を見に来たのでした。初めてシルヴァに会う公爵夫妻ですが、公爵はボニ公爵夫人（実はシルヴァ）の美しさにデレデレになります。「いやあ、それにしてもお美しい。この国最高の美人ですな。気品といい、お声といい、伯爵夫人にふさわしい！ボニ、君はわしの次に見る目があるようだな。」この国の人でもなく、伯爵夫人でもないシルヴァを手放しでベタ褒めする公爵に、ボニとシルヴァは苦笑い。そこへ、シュターズィが現れます。久しぶりに会ったボニは見事に一目惚れ。公爵夫人にシルヴァを夫人だと紹介されたボニは困り果てたところに、元大使のフォン・ビリングが現れます。彼は、ボニ伯爵夫人にそっくりな人をニューヨークで見た、と主張します。シルヴァは動ぜずに「個人的には存じませんが、よくその人に間違えられます。」と答えます。ビリングによると「何でも、ブダペストに貴族の婚約者がいたのに、婚約破棄されて、『チャールダーシュの女王』という呼び名が『チャールダーシュ公爵夫人』になったらしいんです」と笑います。笑顔の引きつるシルヴァに公爵が助け船を出します「伯爵夫人を芸人なんかと比べるんじゃない。例え芸人が貴族の身なりをしたところで、わしら本物の貴族なら、すぐに見抜ける。」そこへエドウィンがボニが妻を連れてやって来たことを知り駆けつけます。エドウィンもシルヴァを見るなりシルヴァと呼びかけ、公爵のメンツは丸つぶれ。公爵は息子エドウィンにシルヴァをボニ伯爵夫人だと紹介します。

シルヴァ 「どうやら私を他の方と混同しているみたいですが、そのシルヴァとやらは、随分私と似ているみたいですね。」

エドウィン 「見た目は全く同じです、伯爵夫人。ほくろの位置まで。」

エドウィンにはシルヴァであることがはっきりと分かっているのです。そこに隣の部屋からファンファーレが鳴り、人々はダンスへと去って行きます。ボニを引き留めたエドウィンはなぜ二ヶ月近くも音沙汰なく、しかもシルヴァと結婚したのか、と詰問します。ボニはシルヴァとは条件付きで結婚したけれど自分たちは「清い関係のまま」だ、といいます。そこへシルヴァがやって来ます。二人きりになったシルヴァはエドウィンにいつ結婚するのか尋ねます。今晚にも正式に婚約が発表されることになる、と答えるエドウィン。

エドウィン 「…これからも、いい友達でいられるよね？」

シルヴァ 「ええ、いいお友達で…」

エドウィン 「オルフェウムでの夜…あの、最後の晩…あれは、ただの夢だったのか…」

シルヴァ 「ええ、ただの夢だった…」

エドウィン 「…人生で、最も素敵な夜だった…シルヴァ、思い出すこと、ある？」

シルヴァ 「ええ、あるわ…」

●9 番 「高らかな歓呼、朗らかな笑い」

(シルヴァ、エドウィン)

結婚誓約書にサインしたあの日、二人で過ごした日々の幸せを思い出しながら、二人は別々の道へ…別れていきます。

そこへやって来たのはシュターズィを口説いているボニ。新婚のくせに口説いてくるボニに不信を募らせるシュターズィですが、ボニは引き下がりません。

シュターズィ 「ひどいお方。もし、あなたが私の夫だったら…」

ボニ 「僕が、君の夫に！？…そりゃ、幸せだ！！」

ボニのいきなりの抱擁に叫び声を上げるシュターズィ。その騒ぎを聞きつけてシルヴァとエドウィンがやって来ます。お互いに意中の人とは別にパートナーを持つ彼らは、相手を嫉妬させようとわざと異なる相手といちゃいちゃし始めます。

● 10 番 「恋人よ、僕は急いで」

(シルヴァ、シュターズィ、エドウィン、ボニ、公爵、公爵夫人、合唱、ダンサー)

四人が四人、それぞれの想いで偽りの恋を演じながら、派手に歌い踊り、途中から公爵夫妻や招待客も参加しての大合唱、ワルツとなります。「人生同じ時は二度とない、だから愛し、今を生きよう！」と。

久しぶりに二人で楽しく踊った公爵夫妻。「レオちゃん」と呼ぶ夫人の声に公爵も大喜び。ですが、息子の結婚話になると「どんなにシルヴァとやらがボニ伯爵夫人と似ていても結婚は許さん！」と声を荒げるばかり。シルヴァと似ているかどうかは関係ないことを夫人に指摘されてしどろもどろになりながらも、夫人にも昔似ている歌姫がいたという噂があったことを思い出します。夫人はその話になったとたん、用事を作り出して立ち去ります。そこへやってきたシルヴァに公爵はいいます「どうやらわしも、息子のことが理解できそうな気がする。」結婚を承諾してもらえるかと思わず喜ぶシルヴァですが、あくまでも「恋をするなら」構わない、という返事。絶望するシルヴァですが、公爵をワルツに誘い、踊りながら部屋を出て行きます。

そこへ、お互いに相手を探しながらやって来たシュターズィとボニが現れます。もじもじする二人は偶然を装います。ボニは今は言えない結婚事情があるといいながら、シュターズィを一目見て恋に落ちた喜びを歌います。

● 11 番 「いいかい、君。男は大勢いるけれど」

(シュターズィ、ボニ)

ボニの積極的なアプローチで、二人の心が急激に近づき始めます。二人が手を取り合っ
て部屋を出て行きます。

そこへ、言い争いながらシルヴァとエドウィンが入ってきます。話を聞こうとしないシルヴァにエドウィンは「シルヴァ！…俺が愛しているのは、君だけだ。それは一度だって揺らいだことない。それに、君だって、僕を愛してるはずだ。」と言い、二人は熱いキスを交わします。そこへ戻ってきたボニは、シルヴァに離縁を突きつけます。ボニはボニで新たな恋に忙しいのですから。シルヴァとエドウィンはボニの取り持ちで変わらぬ愛を再び語り合います。

● 12 番 「僕は踊りたい、歓呼したい」

(シルヴァ、エドウィン)

ですが、シルヴァには消しがたい疑念が浮かびます。「でも、私がシルヴァ・ヴァレスクだと知れたら、ご両親はなんとおっしゃるかしら？」その言葉にエドウィンは明るく応えます 「大丈夫、君はボニ伯爵夫人だ。離婚した伯爵夫人なら、我が一族に迎えられる。」と。シルヴァは自分自身ではなく、ボニと結婚して伯爵夫人になった身分で自分が受け入れられていることを感じます。初めて二人の心がすれ違う瞬間です。両親と話をつけてくると立ち去るエドウィンですが、シルヴァは自分のことをエドウィンは恥じていると感じ、この場にいることに耐えられずに立ち去ろうとします。シルヴァの帰る準備を聞きつけて公爵夫妻や人々がやって来ます。まだ帰らぬよう説得する公爵夫妻。公爵夫人は人の集まっている今こそ、エドウィンとシュターズィの婚約を発表すべきだと提案します。公爵は人々に重大な発表があると告げ、シルヴァにもこの場に残るように頼みます。

公爵 「親愛なる皆さまへ発表いたします。ここに、一組の新しいカップルの誕生をお伝えさせていただきたい。幼少のみぎりからお互いを好いていた二人が、今夜、正式に婚約したことを発表します。私の愛する一人息子、エドウィンと、愛する姪、シュターズィが…」

そこへ、エドウィンがボニを振り払って登場します。公爵とシュターズィに謝り、自分には他に好きな人がいる、と告げます。

● 13 番 「父上、シュターズィ、お許してください～二人の人間が愛し合っている」

(エドウィン、シルヴァ、シュターズィ、公爵夫妻、合唱、ダンサー)

その熱い告白を聞き、シュターズィも自分があなたを縛ることはしない、とエドウィンに告げます。公爵は二人の言動に衝撃を受けます。では、いったいエドウィンの好きな人とは誰なのか、と問うとエドウィンが答える前にシルヴァが答えます。伯爵夫人がそのようにいうことを冗談かと思う公爵ですが、シルヴァは冗談ではないと答えます。そして自分はボニ伯爵夫人ではなく、エドウィン公爵夫人になるのだ、と告げます。結婚誓約書を見た公爵は呆然とします。伯爵夫人がああチャールダーシュの女王だったのだ…と。しかし、シルヴァは誓約の期限もあと数時間残っているとしながらも、自らの意

思で誓約書を破り捨て、エドウィンに「自由」を告げます。驚く一同を尻目に、シルヴァは「最初から、私たちは結ばれぬ運命だったの…決して幸せになることのない。」と言いきり、ボニとその場を立ち去ります。エドウィンは追いかけてやりますが、公爵に止められて、第二幕の幕が降ります。